

手賀沼通信(第342号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は5月号に続いて大学の後輩北村尚巳さんから頂いたエッセイです。

特別寄稿

長野県歌『信濃の国』と信濃の歌枕

北村 尚巳

私の郷里の長野県には『信濃の国』という県歌があります。子供時代から学校などで歌わされ、大人になってからも、郷里の会（東京小諸会など）でも『故郷』と共に必ず歌います。

『故郷』は、高野辰之作詞・岡野貞一作曲による文部省唱歌です。作詞者の高野辰之は、長野県水内郡永江村（現中野市）の出身で、日本の国文学者であり、作詞家としても活躍した人物です。文部省の教科書編纂委員として、岡野貞一らとともに「故郷」「朧月夜」「春の小川」「紅葉」など、日本の唱歌史に残る数々の名曲の作詞を手掛けました。

「故郷」の歌詞の三番目に

山は青き故郷 水は清き故郷

とあり、まるで信州の山や千曲川などの川を詠んでいるように思われ、第二の県歌とも言えます。さて、「信濃の国」の歌詞をご紹介します。

1. 信濃の国は十州に 境つらぬる国にして
聳ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し
松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地
海こそなけれ物さわに よろず足らわぬ事
ぞなき
2. 四方に聳ゆる山々は 御嶽乗鞍駒ヶ嶽
浅間は殊に活火山 いずれも国の鎮めなり
流れ淀まずゆく水は 北に犀川千曲川
南に木曾川天竜川 これ亦国の固めなり
3. 木曾の谷には真木茂り 諏訪の湖には魚多し
民のかせぎも豊かにて 五穀の実らぬ里やあ

る

しかのみならず桑とりて 蚕飼いの業の打ち
ひらけ

細きよすがも軽からぬ 国の命を繋ぐなり

4. 尋ねまほしき園原や 旅のやどりの寝覚の床
木曾の棧かけし世も 心してゆけ久米路橋
来る人多き筑摩の湯 月の名にたつ姨捨山
しるき名所とみやびおが 詩歌に詠みてぞ伝
えたる

5. 旭將軍義仲も 仁科の五郎信盛も
春台太宰先生も 象山佐久間先生も
皆この国の人にして 文武の誉れたぐいなく
山と聳えて世に仰ぎ 川と流れて名は尽きず

6. 吾妻はやとし日本武 嘆き給いし碓氷山
穿つトンネル二十六 夢にも越ゆる汽車の道
道一筋に学びなば 昔の人にや劣るべき
古来山河の秀でたる 国は偉人のある習い

1番～2番は地理で、

四つの平は、松本平・伊那平・佐久平・善光寺平
四方に聳ゆる山々は、御嶽山・乗鞍岳・駒ヶ嶽・
浅間山

流れ淀まずゆく水は、(北へ) 犀川・千曲川 (南
へ) 木曾川・天竜川

3番は産業で、林業、漁業、農業、養蚕

4番は名所・旧跡で、園原、寝覚の床、木曾の
棧、久米路橋、筑摩の湯、姨捨山

5番は偉人で、木曾義仲、仁科五郎、太宰春台、
佐久間象山

6番は伝説と現代で、日本武尊・碓氷峠、信越
線の26ものトンネル

歌のテンポは、4分の4拍子で、114程度の速
さで、「誇りをもって力強く」と指示があり、全般
に元氣溢れる行進曲風に歌われるが、名所・旧跡
の第4番はゆったりと情緒あふれるメロディーに
変わり、速さも *largo* になり、極めて技巧的にで
きている。

『信濃の国』誕生の経緯



明治31(1898)年11月、教員団体である信濃教育会が、県民を奮励するような唱歌を作ろうということになった。この委嘱を受けた委員の中の一人に、長野師範学校（現：信州大学教育学部）で音楽を教える教諭、依田弁之助がいた。依田は同じ教諭の浅井洌（きよし）に作詞を依頼した。

作詞の要点は地理と歴史を取り入れた内容に重きを置いた。かつて長野県には十一藩の小藩と何百という峠により十州（8 県）に接する地形であった。しかも全面積の76%が山林地帯で、林業と養蚕製糸業以外には産業に乏しい貧乏県だった。

浅井は南信・北信の分裂を避けるために「信濃の国は一つ」という大原則に立って作詞に専念した。北信・南信のバランスを考慮したのはいうまでもない。そして長野県というフレーズを避け、一貫して信濃の国としたのである。

依田弁之助の作曲による『信濃の国』はあまり好評を得なかった。依田の東京音楽学校の後輩北村

季晴は、1899 年依田の招きでその後任として青森師範から長野師範に赴任し、1900 年『信濃の国』の作曲を行うこととなる。

作詞者浅井洌(れつ)は、1849 年松本藩士大岩昌言(まさのり)の三男として生まれる。旧制中学教員などをへて、1886 年（明治 19 年）長野師範学校教諭となる。1899 年（明治 32 年）『信濃教育会雑誌』に『信濃の国』を発表。

作曲者北村季晴は、1872 年東京で生まれ。父は教育者でヘボンと親交があり、その勧めで明治学院に入り、ここでは島崎藤村とも仲良くなる。1889 年に東京音楽学校に入学。卒業するとまずは師範学校の教師になった。1930 年没。

信濃教育会が作成した CD・DVD の添付された解説では、北村季晴が作曲した曲は、長野県師範学校の運動会で女子部生徒のダンス用として発表されたものが、今、歌われている、としている。そして、長野県民であれば、ほとんどの人が歌えるほど浸透しているが、それほど普及したのは、師範学校出身の先生たちが県内各地の学校でこの曲を教え伝えたからだと言われている。

また、ウィキペディアでは、「元は長野県師範学校附属小学校の郷土唱歌として作られ、その後身に当たる信州大学教育学部附属長野小学校の校歌としても歌い継がれている。

太平洋戦争が終結した 1945 年（昭和 20 年）以前は「秋田県民歌」や山形県の「最上川」と並ぶ「三大県民歌」と称され、戦後も実質的な長野県歌として歌われて来たが 1968 年（昭和 43 年）5 月 20 日の県告示で正式に長野県歌として制定された。

1998 年に開催された第 18 回冬季オリンピック・長野大会での開会式、閉会式の日本選手団の入場にも使われた。」とされている。

前述の CD の解説書によれば、長野新幹線開通前の信越線の特急「あさま」や中央線の特急「あずさ」の車内でもそのメロディーが使われた。1998 年の冬季長野オリンピックで演奏された際は、スタンドを埋めた観衆から歌声が沸き起こり大合唱になった。「信濃の国」は「日本で最も有名な県歌」と言われているそうです。

分県運動と『信濃の国』に関わる逸話

明治 4 年（1871）の廃藩置県で、信濃の国は筑摩県と長野県の二つが設置された。筑摩県とは松

本・諏訪以南の南信地区、長野県とはそれより北の北信地区をいう。

明治 9 年（1876）、筑摩県庁が焼失した。これを機に明治政府は筑摩県を長野県に合併させてしまった。

昭和 23 年（1948）、今度は県会議事堂が落成の翌日に焼け落ちた。この機を逃さずと南信側が決起した。分県問題は本会議に上程され決着をつけることになった。当時、議員定数は北信・南信ともに 30 対 30 の同数。結果は北信側の 3 議員が白票を投じて 29 対 26 となり賛成が上回ったものの、可決には出席議員の過半数が必要であり、結局は廃案となり、南信側はあえなく敗退した。

北信側には策士が多かったと思われる。傍聴席から溢れた反対派の県民に議場の外で信濃の国を歌わせたのである。それは採決とともに傍聴席にも伝染し大合唱になった。信濃一國主義への賛歌として利用され最後には同調して加わった南信側の議員もいたという。

「歌枕」-信濃国編

「歌枕」とは、『古くは和歌において使われた言葉や詠まれた題材、またはそれらを集めて記した書籍のことを意味したが、現在はもっぱらそれらの中の、和歌の題材とされた日本の名所旧跡のこと』を指す。（ウィキペディア）

「契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは」

「小倉百人一首」にも採られた清原元輔（908～990 年）の歌だ。「二人は決して心変わりしないと、約束したよね。末の松山を波が越すことがないように」と解釈でき、この松山を波が越すのは「ありえないこと」の象徴とされてきた。ここで歌われた波こそ、平安朝の大地震、貞観地震（869 年）の大津波といわれる。

信濃国に関わる歌枕を幾つかご紹介したい。

・千曲川：日本一の長流信濃川の上流、新潟県に入り信濃川と呼び名が変わる

信濃なる千曲の川のさざれ石も君し踏みてば玉と拾はむ （万葉集巻 14 東歌 3400）

・望月の牧：都に献上する貢馬を育てる信濃十六牧の一つでその中では最大の牧

逢坂の関の清水に影見えて いまやひくらむ望月の駒 （拾遺和歌集・紀貴之）

・姨捨山（うばすてやま、おばすてやま）：正名は

冠着山（かむりきやま）。更科（級）山（さらしなやま）とも言われる。長野県千曲市（旧戸倉町と旧上山田町の境）にある。

我が心 慰めかねつ 更科や をばすて山に照る月を見て（『古今和歌集』、よみ人しらず）

・木曽の棧（木曽郡上松町の国道 19 号の下にある橋跡）。木曽川沿いには、通行困難な断崖がいくつかあった。そのため断崖に差し込んだ丸太の上に板などをあてて通り道とした栈道（さんどう）を設けた。



ひときれば都をすてて出づれどもめぐりてはなほきそのかけ橋（山家集）

・寝覚めの床：木曽郡上松町にある国の名勝。木曽川の激流が花崗岩を削り出して作った巨大な岩の渓谷美で、浦島太郎が玉手箱を開けて夢から覚めた伝説の地としても知られています。

谷川の音には藤も結ばじを目覚めの床と誰が名つくらん （近衛摂政家照公）

「みすずかる」－「信濃の国」にかかる枕詞

「みすず飴（あめ）」という長野県の銘菓をご存じでしょうか？ アンズ、ウメなどの果汁液を水飴と寒天で固めた、見た目もきれいなゼリーである。「みすず」は、「みすずかる信濃（しなの）」によるネーミングだという。

だが、名前の由来になったという「みすずかる」は、存在しなかったのに存在するという不思議なことばだということをご存じだろうか。

「みすずかる」の「み」は接頭語、「すず」は篠竹（すずたけ）で、その「スズタケを刈る」という意味なのだが、漢字で書くと「御簀刈」となる。スズタケは日本特産の主に山地の森林の下草として生える竹である。

「みすずかる」は、もともとは『万葉集』に出

てくる語なのだが、隣接する短歌二首（巻二・九六、九七）にしか見られない。いずれも、「水（三）薦刈る 信濃（しなの）の真弓（まゆみ）」の形であるため、信濃にかかる枕詞（まくらことば）だと考えられている。「真弓」は弓の美称である。

ところで、注意深い方ならすでにお気づきかもしれないが、「みすずかる」の漢字表記は「み簞刈」だが、『万葉集』の漢字表記は「み薦刈」で、「簞」と「薦」が異なるのである。

「薦」は「簞」とは読みも意味も全く異なる漢字で、「こも」と読みマコモの古名である。マコモは水辺の生えるイネ科の多年草で、編んでむしろを作る。酒だるの「薦被り」の「こも」だということとおわかりいただけるかもしれない。

「みすずかる」という語は、江戸中期の国学者賀茂真淵（かものまぶち）が『万葉集』にある「み薦刈」を「み簞刈」の誤字であるとし、それを「みすずかる」と読んだことで広まった。江戸後期の俳人小林一茶が、急死した父との最後の日々をつづった『父の終焉日記（しゅうえんにつき）』にも、「梨一参らせたく思へども御簞刈しなの不自由なる我里は青葉がくれに雪のしろじろ残るばかり（5月7日）」とある。「御簞刈」は「簞」なので「みすずかる」と読む。食欲のなくなった父親にナシの一つも食べさせたいと思うのだが、ふるさとの信濃は不自由な場所にあると嘆いているのである。

「みすず飴」が作られたのは「みすず飴本舗飯島商店」のホームページによると明治末年からのようだが、その時代は「みすずかる信濃」という言い方がふつうだったのである。

ところが、昭和に入って国文学者の武田祐吉（ただけゆうきち）が『万葉集全註釈』の中で誤字説を採らず「み薦刈る」のままとし、しかも「みこもかる」と読むべきであると主張したため、現在では、この武田説が主流になっている。

「みすずかる」は以上のような経緯で生まれた語で、万葉学的には葬り去られた語かもしれないが、辞書的には挙例のような一茶などの用例もあり、立派に存在していることばなのである。

そんなウンチクを知っていれば、みすず飴の味も香りもさらに楽しめるかもしれない。もちろん製造元の回し者ではないのだが。

（ジャパナレッジ > 知識の泉 > 285回「みすずかる」と「みこもかる」）

みすず飴の名前の由来（飯島商店のホームページ）



古来より「みすず」とは信濃の国を表す枕詞（まくらことば）として親しまれてきました。

その「みすず」とはスズタケのこと。さわやかな大気と清冽な川の流れ、ゆたかな自然に抱かれた信濃の国を表しています。私たちは、その名に寄せて、ゆたかに育まれた自然の風味をそのままに、お届けする菓子作りの心を込めました。

すずたけ（篠竹）

ササの一種。ブナの林下に群生する。



高さ1～3メートル。鞘は往々紫色を帯び平滑。

7月頃まれに茎頂に被針状の小穂を生ずる。

花後実をつけたのち枯れる。スズ。ミスズダケ。万葉集には次のような歌があります。

96. み薦刈信濃の真弓吾が引かばうま人さびて否
と言はむかも（禅師）
97. み薦刈信濃の真弓引かずして
弦著くるわざを知ると言わなくに（朗女）

長野県歌「信濃の国」の歌と風景の映像を Web の YouTube でご覧頂けます。

<https://www.youtube.com/watch?v=ePSKD8G7BXE>